世界に広がる法華経展

東洋哲学研究所が企画・制作する「法華経――平和と共生のメッセージ」展は、後述する開催の淵源から本年で二十周年の佳節を迎えた。

研究所は、東洋思想、なかでも仏教の思想・哲学の研究を進めるとともに、各学問分野との学際的研究を行い、人類が抱える諸問題の克服に貢献することを目的に一九六二年一月、池田大作SGI（創価学会インターナショナル）会長によって創立されたが、法華経展は、創立の際に掲げられた大乗仏教・法華経を中心にした研究活動の一環である。

仏教は紀元前五世紀頃、インドにおいて釈尊によって創始され、以来、広大なアジアを中心に伝播し、多くの民族に信奉されてきた。仏教において大乗仏教とされる教えのなかで、法華経は古来より「諸経の王」と呼ばれ、東アジアを中心にその教えが広く伝播していった。その過程のなかで、伝播した地でさまざまな文化的融合を見せ、世界遺産の敦煌莫高窟（中国）や仏国寺（韓国）、文学・芸術作品などにも大きな影響を与えてきた。

SGI会長は、この経典の位置付けについて、「釈尊の覚者としての『智慧』と『慈悲』が民衆救済へと向かうとき、仏教史を飾る多くの仏典が編纂されました。

No Image

No Image

No Image

No Image

右上から時計回りに、タイ、スペイン、ブラジル、マレーシアでの法華経展。各会場、多くの鑑賞者で賑わった

その中で、特に『法華経』は、自ら、釈尊の悟達の法（ダルマ）の表出と体現を宣言した経典であります。『法華経』が東洋の諸民族に最も親しまれ、広く伝播し、人々の『魂』を救済してきたのも、この経典が内包する深遠な宗教性――宇宙生命との融合の境地とその平易なる表現法にありました」と述べている。

研究所では、ＳＧＩ会長の指針のもと、創価学会との共同事業として、法華経の原典研究に寄与する「法華経写本シリーズ」の研究・編集を行い、いわゆる「ペトロフスキー写本」と呼ばれる『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵梵文法華経写本（ＳＩ　Ｐ／５他）――写真版』、『インド国立公文書館所蔵　ギルギット法華経写本――写真版』など十七点を刊行。

また、国内外の仏教、法華経を研究するロケッシュ・チャンドラ博士（インド文化国際アカデミー理事長）、季羨林博士（北京大学終身教授）、中村元博士（東京大学名誉教授）をはじめとする学識者と交流を重ね、研究所学術誌への論考の掲載やシンポジウム・研究会を開催してきた。

No Image

No Image

8世紀頃の書写と推定される「ペトロフスキー写本」（写真上。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵）と、まとまった仏教写本の中で最も古い時代のものの一つである「ギルギット写本」（インド国立公文書館所蔵）は、6世紀末から8世紀初頭の書写と推定される

展示活動では、「法華経とシルクロード」展（一九九八-二〇〇〇年）、「法華経――世界の精神遺産」展（二〇〇三～〇四年）、「法華経――平和と共生のメッセージ」展（二〇〇六年～現在）と変遷。その間にも、「仏教経典：世界の精神遺産――写本と図像で知る法華経」展（二〇一六年～現在）などを開催して、法華経研究の成果を一般に公開する試みを行ってきた。

法華経展の淵源となった一九九八年開催の「法華経とシルクロード」展は、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所が所蔵する約十万点に及ぶコレクションの中から、オリジナルの仏典写本、木版本など十四言語四十七点が厳選され、日本初公開となった。なかでも門外不出であった「ペトロフスキー写本」が展示されたことについて、法華経写本研究者である戸田宏文博士は「『生きていてよかった』――それが、ペトロフスキー本を見ての私の率直な感想です」と語っている。

そして、同展を発展・拡充したのが「法華経――平和と共生のメッセージ」展であり、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所のほか、中国・敦煌研究院、イ

ンド文化国際アカデミーの協力によって、さまざまな資料や文物が提供されて実現したものである。

法華経伝播の歴史、その現代的意義、普遍性の理解を進める展示会となった同展は、開催地域を国内に留めることなく、仏教発祥の地インド、ネパール、大乗仏教が興隆した中国、韓国、上座部仏教国のタイ、スリランカ、イスラム文化圏のマレーシアなどのアジア地域を巡回。欧州や、南米など世界十六カ国・地域で開催され、二〇一八年現在、鑑賞者の累計は八十万人を超えている。

展示会のコンセプトは、「目で見る法華経」であり、その内容は、学識者・研究者だけでなく、広く一般にも理解し易い内容となっている。

展示の構成は、大きく五つに分かれている。

① 仏教の誕生と法華経伝播の系譜

釈尊の生誕から大乗仏教の興隆。法華経の編纂、鳩摩羅什の漢訳、そして東アジアでの法華経による文化的影響などを、パネルを中心に紹介している。

② 多様な言語に翻訳された経典

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、インド文化国際アカデミーなどが所蔵する写本を用いて、法華経を中心とした大乗仏教経典の写本・木版本の複製品を展示。なかでも法華経は、その伝播の過程のなかで翻訳されたサンスクリットをはじめ、古ウイグル語、チベット語、モンゴル語、西夏語など十を超える言語で翻訳された写本を紹介。梵文法華経写本の「ペトロフスキー写本」、約一千年に渡って地中に埋もれていたギルギット写本は、展示会でも大きな注目を集めている。

③ 法華経写本シリーズ

一九九四年の「法華経写本シリーズ」出版委員会の発足以来、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、インド国立公文書館、大英図書館、パリ・アジア協会などの協力を得て発刊してきた写真版とローマ字版を展示している。

④ 世界の学術機関から贈られた仏教文物

池田ＳＧＩ会長は、法華経写本を所蔵する世界の

研究機関及び研究者との交流を続けているなかで、法華経にゆかりの深い仏教文物を数多く贈られている。展示会では、その一部として、「鳩摩羅什像」（亀茲石窟研究所）、「南條・ケルン本」の初版本（インド文化国際アカデミー）、絵画「飛天」（敦煌研究院・段文傑初代院長）などを公開している。

⑤ 敦煌莫高窟コーナー

展示会の共催団体である敦煌研究院の協力により、敦煌莫高窟に描かれる法華経の経変（経典の内容を人々に理解しやすいよう絵画化したもの）、「三草二木」「化城宝処」など法華経の七譬のパネルや敦煌出土の法華経の複製品を展示する。韓国、タイ、シンガポールの各展示会では、莫高窟八五窟を会場に再現し、法華経変の立体的な展示を行っている。また、「鳩摩羅什の生涯」「法華経の七譬」を解説する動画を上映している。

このほかに、開催国・地域での大乗仏教・法華経の伝播と認知度に応じ、その地の学術・教育機関に協力

「法華経――平和と共生のメッセージ」展　開催国・地域		
1	香港	2006年～2007年、2015年
2	マカオ	2007年
3	インド	2007年、2008年、2009年、2010年
4	スペイン	2009年、2012年
5	ネパール	2010年
6	ブラジル	2010年、2011年
7	スリランカ	2011年、2013年
8	イギリス	2011年
9	日本	2012年、2013年、2014年
10	台湾	2013年、2015年
11	マレーシア	2014年
12	アルゼンチン	2014年
13	韓国	2016年
14	ペルー	2016年
15	タイ	2017年
16	シンガポール	2017年

を要請。韓国の国立中央博物館、マレーシアのケダ州博物館などから資料提供や複製品の製作許諾を得るとともに、詳細な解説の追加を行っている。

二〇一三年には、同展の日本語版ガイドブックが完成。続いて、中国語版（簡体字・繁体字）、韓国語版、英語版も編纂され、合わせて四言語で出版している。

No Image

中国の范興儒画伯より池田SGI会長夫妻に贈られた敦煌莫高窟壁画「飛天」の模写絵

これまで、韓国の李壽成元首相、タイのウィーラ・ロートポッチャナラット文化大臣、香港中文大学終身主任教授の饒宗頤博士、翻訳家のバートン・ワトソン氏をはじめ、各界を代表する来賓が展示会を訪れた際、次のような声を寄せている。

「法華経の多様な写本を拝見しました。これらは、仏教精神への理解を深め、『法華経』のメッセージを世界に広げていく為のこのうえない資料です」（アルゼンチンサルバドル大学東洋学学院カルロス・マヌエル・ルア院長）

「仏教の普遍的価値を浮き彫りにし、人類の精神的遺産の一部とする歴史的な展示会です」（インド国立公文書館ムシルル・ハサン館長）

世界にその開催規模を広げている「法華経――平和と共生のメッセージ」展は、その内容の充実を図りながら、今後も国内外で開催していく予定である。